

「濱口梧陵生誕200年」 記念事業のお知らせ

昨年来、「濱口梧陵生誕200年」ということをお伝えして参りました。その令和2年度が始まり、「やかただより」では曾野洋四天王寺大学教授の「濱口梧陵学」の提案も始まっています。生誕200年記念事業は今年1年中、各種事業を実施することになっています。現時点で確定している計画をお知らせします。

- 6月14日(日) 濱口梧陵生誕200年記念シンポジウム
- 6月15日(月) 生誕記念式典
第14回稲むらの火講座
- 9月27日(日) 第15回稲むらの火講座
- 10月17日(土) 近畿歴史まちづくりサミット
第18回稲むらの火祭り
- 11月1日(日) ふるさとまつり
古民家体験 in 広川町
- 11月5日(木) 第118回津浪祭
世界津波の日

「稲むらの火の館」では、梧陵さんの生誕200年を記念して、皆さまから「梧陵さんへの手紙」を募集します。

現在に生きる私たちは、濱口梧陵さんがあの昔大地震の後、津波が襲ってくることに気付いて、広村のみんなに避難するよう教えてくれました。村人はすぐに避難したおかげで多くの方が助かりました。また、教育の必要性を感じた梧陵さんは、一族の濱口東江さんや友人の岩崎明岳さんと一緒に「広村稽古場・耐久社」を創立、今の耐久中学校、耐久高校へと繋がっています。

その他にもいろいろありますが、こうした事に感謝していますが、それを手紙として表現してみませんか。残念ながら、実際には梧陵さんに届きませんが、「館」が変わって受け取ります。返事の代わりにりっぴな手紙は表彰いたします。

募集の詳細は、後日お知らせいたします。

「濱口梧陵生誕200年記念」

第14回稲むらの火講座案内

前項でも本年の「生誕200年記念」で予定している事業計画を掲載いたしました。その中にも記していましたが、「第14回稲むらの火講座」のご案内をさせていただきます。

「稲むらの火講座」は平成27年(2015)に始まりました。「稲むらの火」「濱口梧陵」「津波防災」をキーワードとして、年に2、3回の間隔で開催して参りました。途中、台風や本年の新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2回も中止をするということもありました。それも通算していますが、今回14回目ということになります。



今回は拓殖大学大学院特任教授・防災教育研究センター長、(一財)防災教育推進協会の常務理事・事務局長の濱口和久先生をお招きします。濱口先生は、防

災教育だけではなく「濱口梧陵」の研究者としても知られています。「濱口梧陵生誕200年記念」の「稲むらの火講座」の講演会講師として最適だと考えています。

日時 6月15日13:30～15:00

場所 稲むらの火の館3階

演題 「稲むらの火」の遺産と

濱口梧陵の防災思想

今回の6月15日は梧陵さんの生誕200年を記念して「館」の見学は無料となります。講演の聴講と見学を合わせてお越しください。

講演会の定員は90名で、申込順とします。

TEL 0737-64-1760

FAX 0737-64-1761 まで

申し込んでください。

濱口梧陵と福沢諭吉の共鳴（その2）

— 豊かなく利他の精神 —

紀州内外の緑が、とてもまぶしい好季です。しかしながら、新型コロナウイルスのさらなる感染拡大に直面した私たちは、まだまだつらい時期を経験することになりそうです。

広川町の皆さまにおかれましては、光まぶしい5月を迎え、いかがお過ごしでしょうか。政府や自治体などによる新型コロナ対策にも十分に留意しながら、お互いにいっそう自愛し、日々の生活を少しでも好転させたいものであります。

（本稿は4月初旬に執筆したものです）



著者紹介
四天王寺大学教授
慶應義塾大学客員研究員
曾野 洋氏

1964年和歌山県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、神戸大学大学院修士課程、名古屋大学大学院博士課程、慶應義塾大学SFC研究所上席所員、慶應義塾福澤研究センター客員所員、四天王寺大学教育学部長、同大学IR戦略統合センター長などを経て、四天王寺大学教授、慶應義塾大学研究員を兼任。2012年より毎日新聞にて、「範は紀州史にあり」を連載中。

皆さま、こんにちは。「濱口梧陵生誕200年未来会議」（会長・西岡利記町長）委員の、曾野 洋（その・ひろし）です。本日の私はまず、こんな史実を紹介します。

実は本年、生誕200年を迎える濱口梧陵（1820～85年）の生きた時代も、現代と同様で、先人たちはさまざまな感染症と格闘しました。例えば、コレラや天然痘とであります。

幕末維新期にヤマサ醤油の経営に従事した濱口梧陵は、「洋書を読まざれども博識の士なり」（『福沢諭吉全集』）と評されました。福沢が「博識」だと称賛した濱口は、三宅良斎（みやけ・ごんさい）をはじめとした一流の蘭方医とも近しく、医師たちと連携して、幕末に流行したコレラの防疫に努力しました。

また、天然痘の予防や治療を目的の一つに掲げ設立された医療機関・種痘所（東京大学医学部の源流）の充実のため、ばくだいな寄付金を出した濱口は、まさに近代医学の発展に大きく貢献したのであります。＜自分さえよければ、いい＞とは

決して思わず、＜世の為、他人の為＞という生き方を重視した濱口らしい＜利他の精神＞が、こうした寄付行為へとつながったのです。

そんな濱口は蘭方医とだけでなく、広く西洋学を修めた佐久間象山や勝海舟、さらに勝とは仲が悪かったと伝えられる福沢諭吉などという一流の同時代人とも意識して接触し、大きな知的刺激を受けます。彼らとの交流を通して西洋の新知識や新思想を積極的に吸収しようと努力しつづけたのが、濱口という男だ。そう、私は考えています。

こうした努力の結果、浜口は実業界に加え、教育界や行政・政治の世界でも重要な足跡を残しました。例えば、民間から紀州（和歌山）藩の勘定奉行や同藩学習館知事などに登用された直後に試みた教育改革実績は、特筆すべきです。

上記した内容は、和歌山県教育委員会から依頼を受けた私が共編著『和歌山県教育史』全3巻を刊行するために、濱口梧陵に関する参考文献や史料などを吟味した結果、実感したことであります。



さて、先月の「やかただより」第114号で述べたように、明治初期の公設民営学校一件で濱口と共鳴した福沢諭吉も、非常に豊かなく利他の精神の持ち主でした。＜自分さえよければ、いい＞・＜今さえよければ、いい＞とは考えないふたりだったからこそ、濱口と福沢の良好な関係が、濱口の死まで継続したと思うのです。

そこで次に、福沢諭吉の＜利他の精神＞をめぐる興味深い史実について少しばかり語ります。「稲むらの火」の逸話で有名な濱口梧陵と仲良しになった、福沢にはこんな側面がありました。

日本は自然災害が多い国です。それは、今も昔も同じであります。1891（明治24）年10月28日、岐阜県と愛知県を中心に推定マグニチュード8の大きな地震が発生しました。死者と行方不明者は7000人以上、家屋全壊が14万戸以上という大規模な被害を招いた濃尾地震です。この時、東京にいた福沢諭吉（1835～1901年）は、ある一手を迅速に打ちました。その一手とは、福沢が1882年に創刊した日刊新聞「時事新報」を舞台とした独自の被災地支援キャンペーンのことであります。そうなのです。福沢は学校（慶應義塾）だけでなく、新聞社も経営していたのです。

「時事新報」は地震が起きた2日後に早くも、「大地震に付義捐金募集広告」を掲載して、大々的に被災地支援金募集を開始しました。広告は事務的なものでなく、福沢自ら筆を執り、読者の心情に強く訴える表現を重ねたものであります。広告で福沢諭吉は、こう強調しました。「苟（いやしく）も慈善の志あらん人々は旧を憶ひ今を憐み、多少の金を損（す）て、被害地方の死亡者負傷者貧困者を救ひ給はらんこと切望に堪へず」と。

慶應大阪シティキャンパス
福澤研究センター講座
2018
全5回

時事新報を讀む

「時事新報」は福澤諭吉が創刊した日刊新聞で、戦前の東京では「五大新聞」の一つに数えられるほどの有ク紙でした。その中の記事は、福澤が直接執筆し、たとえどこに「不偏不党」「独立不羈」の立場をとり、様々な分野に迫ります。

第1回 11月24日(土)
時事新報創刊の経緯と背景
初期の社説を「取り上げよう」
井奥 成彦

第2回 12月15日(土)
『時事新報』の郵便重視論
—明治15年郵便料金を改定をめぐって—
小室 正紀

第3回 1月26日(土)
『時事新報』と災害復興支援
—そのとき福澤諭吉は?—
曾野 洋

第4回 2月16日(土)
草創期『時事新報』の「政治家」論
—明治初期の政治家に「就いて」考える—
柏原 宏紀

第5回 3月16日(土)
福澤諭吉に「とつての新聞」
—時事新報社説執筆論争や「脱亜論」批判への視座—
都倉 武之

■開催時間: 14:00~16:00(開場13:00) ■申込方法: Web申込またはFAX・郵送申込
 ■会場: 慶應大阪シティキャンパス http://www.kor.keio.ac.jp/ FAX:06-6359-5548
 ■開催定員: 70名 ■申込締切: 随時受付 ※定員になり次第、締切
 ■受講料: 全5回一括申込 8,500円(税込) (各回申込み1枚につき2,000円(税込))
 ※各回申込みの場合は、一度のお申込枚数2枚につき500円割引いたします。

福沢諭吉の訴えにいち早く共鳴し、「時事新報」にすぐさまポケットマネーを寄贈した男がいました。紀州出身の陸奥宗光（1844～97年）です。当時の陸奥は農商務大臣であり、彼が福沢のキャンペーンにすばやく応じた影響力はかなり大きいものでした。このあたりのおもしろい事情や、福沢によるキャンペーンの真の狙いなどについて最近の研究成果や仮説に基づき、私は2019年1月に慶應大阪シティキャンパス（JR大阪駅北側のグランフロント内）で講演したことがあります（慶應義塾福澤研究センター講座）。

大阪での講演内容をさらに進化させるかたちで、濱口梧陵と福沢諭吉の豊かなく利他の精神について、新型コロナ騒動がおさまって世の中がおちついた頃に開催されるであろう、広川町「濱口梧陵生誕200年未来会議」や「稲むらの火講座」などにおいて語りたいたいものです。広川町を再訪できる日が、私は楽しみであります。



こんにちは！「こども梧陵プロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！

今回も、稲むらの火の館で昨年ガイドを実施した際に、来館者に向けて広小学校の児童たちが出題したオリジナルクイズを掲載します。

問1 (津波について)

水深が5,000mのところでの津波のスピードは、どれくらいでしょうか？

- 1: 自動車
- 2: 新幹線
- 3: ジェット機

<答え・解説>

正解は「3: ジェット機」並みのスピードです。

津波は、深い場所では速く伝わる性質があります。陸に近づくと、徐々に速度が落ちますが、人が走って逃げきれぬものではありません。



問2 (対応言語について)

「稲むら火の館」は世界各国から人が訪れます。では、いくつの言語に対応しているのでしょうか？

- 1: 3つの言語
- 2: 5つの言語
- 3: 8つの言語

<答え・解説>

正解は「3」の「8つの言語」です。対応している国と地域は、日本、英米、中国・台湾、韓国、フランス、インドネシア、スペインです。「稲むらの火」の逸話が見直されて「世界津波の日」が制定されたことにより、海外からの来館者も増えてきました。

早く新型コロナウイルスの問題が鎮静化して、世界中の人と交流できる日が戻ってくることを願っています。

(2020/3/18 執筆)



「古文書調査」がありました

広川町は「稲むらの火」の話題だけではなく、熊野古道や全島縄文・弥生遺跡の鷹島等歴史的にはたいへんおもしろい町です。こうした歴史や文化を掘り下げるために、これまで「やかただより」でも昔の写真や古文書の提供を呼びかけて参りました。この程、町内S家からたくさんの手紙等の古文書が提供されました。



県立文書館と博物館の古文書調査の専門家の方々が来られて、一枚ずつ丁寧に調査されました。手紙等は、差出人・受取人をきっちり分類され、文章の内容から職業や取引相手の様子等を説明していただきました。

皆様のお宅でも、こうした昔の手紙や祖先の方が書かれたメモのようなものに、その家の歴史が分かるものがありますので、お知らせください。県立文書館の専門家にお繋ぎいたします。

国土地理院地図に

自然災害伝承碑記号が表示 !!

この程、国土地理院の地図に、新たに「自然災害伝承碑」の記号が表示されるようになりました。広川町では、写真のように広村堤防のところにある「感恩碑」と広八幡神社の「濱口梧陵頌徳碑」の2か所が表示されました。



これまで、このような「自然災害伝承碑」の記号は国土地理院の地図にはありませんでした。その上、インターネットで検索して、この部分を表示させてクリックすると、石碑の写真と、いつの災害を伝承しているかを表示する

ようになっています。試してみてください。